

霞

—2026年度夏季展示室だより—

令和8年6月30日発行(通巻第67号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展示会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(67)

古写真

「霞ヶ浦格納庫前広場に参集せる人々とツェペリン伯号」
はくごう



昭和4(1929)年8月19日、霞ヶ浦に飛来したツェペリン伯号の写真です。ツェペリン伯号がドイツから霞ヶ浦へ飛来すると、連日数万人の観衆がその巨大な飛行船を見物しようと押しかけました。当時の霞ヶ浦には、大正11(1922)年に開隊した霞ヶ浦海軍航空隊の飛行場があり、飛行場内には同13年にドイツから移設された大型の格納庫(押収格納庫)がありました。



土浦市の歴史文化遺産
情報ライブラリー
土浦市立博物館サイト

博物館からのお知らせ

☆☆☆夏休みファミリーミュージアムを開催します☆☆☆

テーマ展「土浦の歴史探検隊—博物館の『何これ!?!』セレクション—」7月18日(土)~10月4日(日)

※7月20日・9月21日を除く月曜日、7月21日(火)・8月12日(水)・9月24日(木)は休館です。

戦争の記憶を語るパネル展示・映像上映 7月18日(土)~8月30日(日)

会期中の体験イベント

①戦争体験のお話をきく会 対象:どなたでも(定員30名)、参加費無料

8月8日(土) 午前10時30分~11時30分

②親子はたおり教室 対象:小中学生家族(定員各回2組)、参加費200円

「はたおりの会」を講師に招き、古布を使ったはた織り(さき織り)を体験します。

8月20日(木)・21日(金)・22日(土)

午前の部/10時30分~正午 午後の部/1時30分~3時

③ミニ掛軸をつくろう 対象:小中学生家族・高校生(定員8組)、参加費1,500円

7月28日(火) 午前10時~午後3時(自分でかいた書道作品の裏打ち)

8月4日(火) 午前10時~正午(書道作品を掛軸として表装)

●各イベントの申し込み方法

①7月7日(火) 午前9時から博物館に電話(029-824-2928)またはホームページ専用フォームにて受付

②③7月7日(火) 午前9時からホームページ専用フォームにて受付開始(③は7月19日(日) 締切)



博物館マスコット
亀城がめくん

あおいし きざ 青石に刻まれた中世の信仰

— 土浦市内の武蔵型板碑 —

市内^{しじつか}宍塚^{はんにかじ}の般若寺^{げんがじ}には「^{けっかいせき}結界石^{けっかいせき}」（茨城県指定文化財）があり、これまでもたびたび展示紹介をさせていただきました。建長5（1253）年の造立で、筑波山麓^{うんもへんがんとたいかいげそう}でとれる黒色の雲母片岩^{うんもへんがんとたいかいげそう}に「大界外相^{たいかいげそう}」の文字を刻んだ石造物^{いしぞうぶつ}です。布薩^{ふさつ}とよばれる儀礼^{ぎれい}の空間^{くわんかん}を結界^{けっかい}したもので、鎌倉時代^{りっしゅう}の律宗^{りつしゅう}の活動^{かつどう}を示す重要な資料^{しりょう}です。

さて、その結界石^{けっかいせき}の後ろ側^{うしろがわ}に、般若寺^{げんがじ}が所蔵^{しよざう}するもうひとつの石造物^{いしぞうぶつ}が展示^{しんじ}されていることにお気づきでしょうか。鎌倉時代末期^{げんおう}の元応3（1321）年の年紀^{ねんご}をもつ青みがかった石製の塔婆^{とうぼ}で、研究者^{けんきゅうしゃ}が「武蔵型板碑^{むさしがたいたび}」とよぶものです。板碑^{いたひ}は死者^{しよしや}の供養^{くじやう}のために立てられた石製の卒塔婆^{そつたうぼ}です。土浦市指定文化財^{とらふしじていぶんわうざい}である実際の板碑^{いたひ}は、般若寺^{げんがじ}に保管^{くわんぱん}されており、当館^{たうくわん}ではレプリカ^{れぷりか}（複製品^{ふくせいひん}）を展示^{しんじ}してきました。

武蔵型板碑^{むさしがたいたび}は、埼玉^{さいたま}県^{けん}長瀬^{ながせ}町^{ちやう}・小川^{おがわ}町^{ちやう}などで産出^{さんしゅつ}する緑泥片岩^{りよくでい}を用いた塔婆^{とうぼ}です。青石^{あおいし}ともよばれる緑泥片岩^{りよくでい}は、青緑色^{あおいどりよ}の地に白色^{はくしよ}の斑点^{はんてん}がある美しい石^{いし}で、比較的^{ひかくてき}やわらかく加工^{かこう}が容易^{りようい}でした。武蔵型板碑^{むさしがたいたび}は産地^{さんち}である埼玉^{さいたま}県^{けん}を筆頭^{ひつとう}に、関東^{くわんと}各地^{ちがち}で数多く^{かずおほく}確認^{かくにん}され、その分布^{ぶんぷ}は長野^{ながの}県^{けん}にまで及び^{およ}びます。茨城^{いばらき}県^{けん}の南部^{なんぶ}は武蔵型板碑^{むさしがたいたび}の分布^{ぶんぷ}の中心域^{しんしんいき}の東側^{とうがわ}にあたり、縁辺^{えんぺん}寄りに位置^{ちゐ}する土浦^{とらふ}でも4点^{しよん}確認^{かくにん}されています。

市内^{しじつか}では般若寺^{げんがじ}の他に、法雲寺^{ほううんじ}（市内^{しじつか}高岡^{たかおか}）に伝来^{でんらい}した南北朝時代^{えんぶん}の延文6（1361）年銘^{ねんめい}の板碑^{いたひ}があり、こちら^{こちら}も市指定文化財^{しじていぶんわうざい}です。どちら^{どちら}の板碑^{いたひ}も、頂部^{ていぶ}を山形^{やまがた}に加工^{かこう}し、その直下^{ちよく}に二条^{にじやう}の線^{せん}を刻み、扁平^{へいぺん}で細長い^{さいながい}形態^{けいぎ}をしています。青石^{あおいし}でこの形^{かたち}を造り出し^{つく}ている点^{てん}が武蔵型板碑^{むさしがたいたび}の特徴^{ていしゅ}です。中央^{ちゆうじやう}には阿弥陀如来^{あみだにょらい}を表す種子^{しゆじ}（梵字^{ぼんじ}）「キリーク」が刻まれています。種子^{しゆじ}の刻み方^{きりかた}は鋭く深い薬研彫り^{やげんぼ}で、種子^{しゆじ}そのものが美しさ^{うつくし}を生み出し、青石^{あおいし}の中^{ちゆう}での存在感^{くわんざい}が際立^さっています。武蔵型板碑^{むさしがたいたび}の多く^{おほく}では、種子^{しゆじ}や像容^{しやうじやう}で阿弥陀如来^{あみだにょらい}を表^{あらわ}しており、このこと^{このこと}から板碑^{いたひ}は、死者^{しよしや}供養^{くじやう}につながる浄土^{じやうど}信仰^{しんぎやう}に基づいて造立^{ぞうたつ}されたもの^{もの}と考え^{かんが}られます。



す。なお、般若寺^{げんがじ}の板碑^{いたひ}では、種子^{しゆじ}の上部^{じやうぶ}には天蓋^{てんがい}が、下部^{じやうぶ}には蓮座^{れんざ}と花^{はな}を挿^さした花瓶^{けびやう}もみられ、荘厳^{しやうげん}な印象^{いんげう}を与^{あた}えます。

ちなみに、博物館^{ぼくぶくわん}ではもう1点^{いちてん}、市内^{しじつか}手野^{てのま}町^{ちやう}で出土^{しゅつど}した16世紀^{じゅうろくせい}の武蔵型板碑^{むさしがたいたび}を展示^{しんじ}することがあります。こちら^{こちら}は、大量^{たうりやう}の銭^{せん}を壺^かにいれて地中^{ちちゆう}に埋めたいわゆる「埋蔵銭^{まいざうせん}」とともに発見^{はっけん}されたもので、板碑^{いたひ}は壺^かの蓋^{がい}として使^{つか}われたようです。全体^{ぜんたい}に摩耗^{まもう}が激しく大き^{おほ}きさもだいぶ小型^{せうがた}で下部^{じやうぶ}を欠^かいています。なぜ、埋蔵銭^{まいざうせん}の蓋^{がい}として武蔵型板碑^{むさしがたいたび}が転用^{てんじゆう}されることになったのか、興味^{きょうみ}はつきませんが謎^{めい}に包^{つつ}まれています。（萩谷良太^{はぎやうらた}）

参考文献

- ・千々和到『板碑とその時代』（平凡社選書116、平凡社 1988年）
- ・千々和到・浅野晴樹編『板碑の考古学』（高志書院 2016年）

般若寺の武蔵型板碑レプリカ（原資料は市指定文化財）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

いずれも中世コーナーに展示しています。

- 結界石（般若寺所蔵）（中世コーナーに展示）
- 埋蔵銭（夏休みファミリーミュージアムテーマ展にて展示）





土浦藩士山村才助（1770～1807）が幼い頃から地理書を好み、世界地誌「采覧異言」を読んだことが蘭学を学ぶきっかけになったことをご紹介します（「霞」15号）。今回は、才助をして「訂正増訳采覧異言」を著すに至らしめた「采覧異言」とはどんな書物だったのか、ご紹介いたします。

「采覧異言」は全5巻（目録参照）、新井白石（1657～1725）が著した日本初の体系的な世界地理書です。国ごとに位置、地形、歴史、人口、風物、産物などについて述べられています。オランダについては「人は長身で髪は赤い、目は青く、鼻が高くても足も赤い、剣を帯び、船では飛ぶように早い、陸上では早く走れない」と書かれていました。不備や誤解があることについて才助は、「記事が完全でないことが惜しい」と述べています（「訂正増訳采覧異言」）。

「采覧異言」は、布教のため来日し宝永5（1708）年8月、屋久島で捕えられたイタリア人宣教師ジョバンニ・バッティスタ・シドッチ（1668～1714）を取り調べた際の知識が元になっています。この当時白石は53歳、6代将軍徳川家宣の侍講（学問を講義する者）として家宣に厚く信頼されていました。

シドッチの取り調べは、宝永6年11月22日から12月4日までに4回、江戸小石川の切支丹屋敷（東京都文京区小日向）で行われました。白石はシドッチについて「多くの物事を知っていて、しかもよく覚えている。学問を修めた人としてヨーロッパで有名であり、天文地理に関して特に深い知識をもっている」と語っています（「西洋紀聞」）。その学識、人物、行動を高く評価し、「生涯においてすばらしい出会いをした」と友人に手紙で伝えました。シドッチも白石について「我々の側にいたら、かならず大きなことを成し遂げる人だ」と評価し、2人は互いに認め合っていたようです。

「采覧異言」が完成したのは2人の出会いから16年後の享保10（1725）年5月、白石69歳の時でした。シドッチから得た知識を元にしつつ、多くの書物を参考にしています。力を出し切ったのでしょうか、白石が亡くなったのはその月の19日のことで「采覧異言」は絶筆となりました。（木塚久仁子）

参考文献 ・市島謙吉『新井白石全集 第4巻』（国書刊行会 1906年）
 ・宮崎道生『人物叢書 新井白石』（吉川弘文館 1989年）



「采覧異言」（当館所蔵）

巻之一	エウロバ（イタリア・ローマン・ゼルマニア・ポルトガル・フランス・ラーランド・イスパニア・アンダルシア・カステイラ他）
巻之二	リビア（トルカ・カアプトホエスペイン・マダガスカ）
巻之三	アジア（アラビア・モゴル・ゴア・インデア・セイラン・ボルネヨ・チイナ・スマアタラ・セレベス・スイヤム・ヤアパン他）
巻之四	ソイデアメリカ（チリ・ペルー・ニカラアグワ他）
巻之五	ノオルトアメリカ（ノラパイスパニア・ノラバカラナ・ダ・カルホルニヤ他）

「采覧異言」目録（国名は原文表記のまま）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
 いずれも近世コーナーに展示しています。
 ●訂正増訳采覧異言（当館所蔵）
 ●坤輿万国全図（当館所蔵）



土浦城での殿中儀礼

— 天保11年、領内諸寺社の謁見 —

天保11（1840）年9月9日、土浦藩主土屋寅直（1820～95）は江戸を発ち、翌10日に土浦に帰国します。同9年に藩主となって以来、2度目の帰国となります。藩主の在国中に行われる殿中儀礼は、藩にとって重要な行事の一つです。国元の家臣や寺社、領民との君臣関係や家臣間の序列を確認する場となるからです。

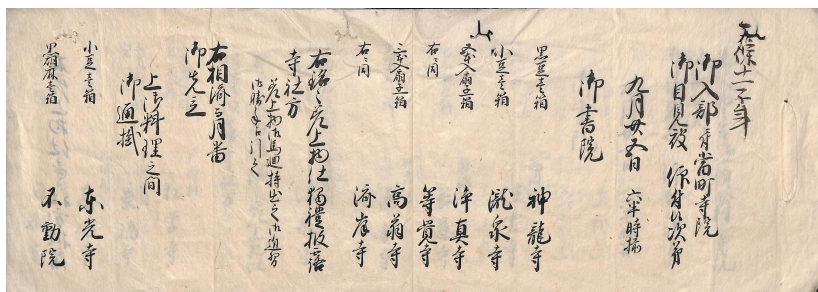
寅直在国中の儀礼に関する史料として、「御入部二付当町寺院御目見被仰付候次第」というものがあります。「御入部二付御領分村々寺院社家山伏御目見被仰付候次第」と題された史料と合綴となっており、主要な領内諸寺社が在国中の寅直と謁見した際の次第が書き留められています。今回は、この史料を手掛かりに、藩主在国中における殿中儀礼の様子を覗いてみます。

寺社の謁見は、9月25日と27日の2日間にわたり、本丸御殿で行われました。初日（25日）は城下の寺院です。まず書院において神龍寺、瀧泉寺、浄真寺、等覚寺、高翁寺、高翁寺、高翁寺の住職らが寅直と謁見、これが済むと料理の間において東光寺、不動院が謁見を行っています。料理の間での謁見は、書院での謁見とは異なり、「御通掛」と呼ばれる、移動途中の寅直にお目通りする形がとられています。また、料理の間は書院と比べて、藩主の居間から少し離れています。このことから、書院で謁見した寺院のほうが、料理の間で謁見した寺院よりも厚遇されていたことがわかります。

2日目（27日）には、法雲寺を筆頭とする領内村々の寺院です。この日の謁見はすべて書院において行われたようですが、単独、3～4ヶ寺1組、11の寺社一同など、謁見時の人数設定に差がみられます。同じ空間（書院）であっても、謁見時の人数によって差を設けていることがわかります。複数よりも単独での謁見のほうが厚遇だったと考えられます。

江戸城における殿中儀礼では、将軍との距離を基準にした格差が設けられていたとされますが、土浦藩においても、藩主との距離が殿中儀礼における重要な基準であったことが窺えます。

また、儀式には相手への贈り物も欠かせません。寅直への謁見にあたり、それぞれの寺社から和紙や扇子、果実など、さまざまな献上の品が贈られました。儀礼への参加者にとって、こうした献上品も序列化や他者との差別化を図る特別な意味があったものと思われます。（井上 翼）



「御入部二付当町寺院御目見被仰付候次第」（当館所蔵）

参考文献 深井雅海『江戸城御殿の構造と儀礼の研究』（吉川弘文館 2021年）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも近世コーナーに展示しています。
●土浦城模型（当館所蔵）
●外丸表奥御殿向惣絵図面（当館所蔵）



とうぎきまち 東崎町文書にみる鳥獵

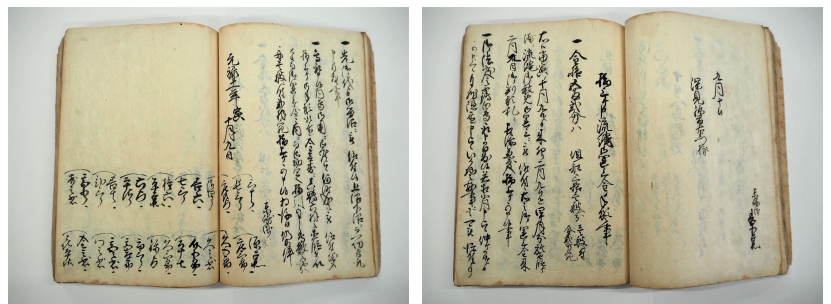
—土浦藩と水辺の人々—

江戸時代の水辺は、物や人を運ぶための流通機構として存在しているとともに、そこで生きる人びとの間では、漁業・鳥獵などの生業の場として重要な意味をもっていました。今回は、江戸時代の霞ヶ浦における鳥獵について、今から約300年前に記された城下町の東崎町（市内東崎町ほか）にのこされた「御用日記」をひも解きながらご紹介します。

本題にはいる前に、江戸時代の鳥獵について少しお話しします。鳥獵とは、水鳥の獵（漁）のことで、鳥繩なわという水鳥捕獲法を用います。鳥繩なわは、流し繩もちなわりょう獵ながしなわや流繩ともよばれ、鳥鷺のついた繩を湖面に張り巡らせ水鳥を捕獲します。現代の私たちが日常的に鶏肉を食すように、江戸時代の人びとも鴨などを食用としています。土浦藩領の村々が鳥獵をするには、藩へ運上金を納めることが必要でした。

旧東崎町の「御用日記」の中に「指上ヶ申流繩御運上金手形之事」という史料がみえます。この史料は、元禄11（1698）年10月9日、東崎町に住む船持漁師ふなもち31名から土浦藩へ提出された運上金手形の写しです。内容をみると、同年10月9日から翌元禄12年2月9日まで4ヶ月分、「鳥繩運上」とよばれる運上金を、船1艘につき金2分ずつ納めることと定められています。また、2月9日に「御判形札」に添えて、31艘分合計金15両2分を運上金として納めることが約束されています。さらに、土浦城の南側に広がる上沼・下沼での鳥獵に関するルールなどについて記されており、①御法度である鶴・白鳥は捕獲しないこと、②「御留沼」（上沼・下沼）では一切鳥を捕獲しないこと、③「鳥御用」の際はいつでも仰せ付けられ次第差し上げ、手形は処分し、金1分につき真鴨6羽の値段をもって全て運上金の中から勘定を差し引きすること、鳥数については、船1艘につき（真鴨）2羽ずつを差し上げること、などを約束しています。「指上ヶ申流繩御運上金手形之事」は、「御用日記」に翌年、翌々年のものも写されており、毎年藩に提出されていたようです。

東崎町における鳥獵から、霞ヶ浦などの水辺の生業をめぐる藩と町の関係性が垣間見えてきます。今後の「霞」でも水辺とともに育まれた土浦のマチ・ムラについて様々な史料をご紹介したいと思います。（石原千尋）



「指上ヶ申流繩御運上金手形之事」（当館所蔵）

参考文献

- ・上高津貝塚ふるさと歴史の広場・土浦市立博物館『霞ヶ浦 人と神と水と 湖のくらし』（1995年）
- ・土浦市立博物館 土浦郁文会『三百年前の土浦（解説） 御用日記元禄十年～十三年』（2001年）
- ・「霞」2008年7月号（通巻4号）より「エビダル漁と水辺のくらし—マチのなかに残された漁具—」
- ・小美玉市 玉里古文書調査研究会『水戸藩 玉里御留川—近世霞ヶ浦の漁業と漁民—』（2010年）



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。いずれも近世コーナーに展示しています。

- 申歳常州土浦東崎町御年貢可納割付之事（当館所蔵）
- 大岩田村裁許絵図（当館所蔵）



はくごう えがら ツェッペリン伯号の絵柄のある着物

—流行を生んだ飛行船—

昭和4（1929）年に、ドイツの巨大飛行船ツェッペリン伯号が霞ヶ浦に飛来しました。航空機が進歩しつつあった時代に、まだ大空の主役であった飛行船が世界一周を計画したもので、その着陸地のひとつが阿見村におかれた霞ヶ浦飛行場でした。

霞ヶ浦飛行場は海軍航空隊の飛行場で、大正10（1921）年7月の臨時海軍航空術講習部（後に霞ヶ浦海軍航空隊として独立）の開場式には5万人が集まりました。その後巨大な格納庫が、第一次世界大戦の戦利品としてドイツから運ばれました。この格納庫で整備や点検をおこなうため、ツェッペリン伯号は霞ヶ浦の地に立ち寄ったのです。

写真はツェッペリン伯号の絵柄のある男性用の羽織です。羽裏に絵柄の入った生地を使うことは、江戸時代から流行し、着脱の際に柄がちらりと見えるおしゃれ着でした。また、裏地に正絹をつけると滑りがよく着替えやすいという機能性もありました。絵柄に注目すると、中央に「GRAF ZEPPELIN D-LZ127」の文字とツェッペリン伯号が、背景の地球儀には「カスミガウラ」の文字を添えた日本列島が配されています。画面左右には「トウキョウ」「フリードリヒスハーフェン」などの寄港地が、画面下には富士山が据えられています。周囲には、すやり霞（日本の伝統的な描き方の雲）などが描かれ、日本風の図案であることがうかがえます。当時の流行を取り入れた着物は、どんな人が身につけていたのでしょうか。



着物の持ち主は、東京・月島の住人であった野上清吉（1888～1956）でした。ご家族によると、清吉は本所の間部家に生まれ、4歳頃に間部家の御用商人であった野上家の養子となりました。12歳で日本橋魚市場の仲卸店「尾栄」で働き、20歳で暖簾分けし「尾清」として独立します。ツェッペリン伯号が飛来した昭和4年には、清吉は41歳で、牡蠣販売の元締めとして全盛期だったと推測されます。順調な商いで、ゆとりある暮らしぶりのなか、当時の流行りの着物をつらえたと考えられます。ちなみに清吉は外出時、常に着物だったそうです。「君はツェッペリンを見たか」が流行語になるなど、一大ブームとなったツェッペリン伯号の飛来。粋な旦那衆のファッションからもその影響が見て取れます。（野田礼子）

写真上 ツェッペリン伯号の絵柄のある着物（当館所蔵）
写真下 同着物の羽裏部分拡大



左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

いずれも近代コーナーに展示しています。

- ツェッペリン伯号飛来を伝える新聞記事（個人所蔵）
- 音楽会入場券（当館所蔵）



市史編さんだより

市史編さん、はじめました。

皆さんは、『土浦市史』をご覧になったことはありますか？昭和 50（1975）年に刊行され、長年にわたり本市の歴史を伝える大切な資料として多くの方々に活用されてきました。現在も図書館などで手にとっていただくことができます。

刊行から約 50 年が経過し、この間に博物館や上高津貝塚ふるさと歴史の広場ができて、調査や研究が進み、新たな発見も数多く積み重ねられてきました。また、旧新治村との合併も経て、今こそ、これまでの歴史を見つめ直し、より充実した内容の新しい『土浦市史』を編さんする時期を迎えています。

また、移りゆく時代の中で、町並みや人々の暮らし、価値観も大きく変化しています。その一方で、地域や人々の心の中に残されてきた貴重な史資料や記憶が失われつつあります。これらを将来の市民へ引き継ぐためにも、今まさに取り組むことが求められています。

このようなことから、土浦市では新しい『土浦市史』の編さん事業を始めることになりました。

令和 22（2040）年の市制施行 100 年に向けた刊行を目指し、令和 7 年度から令和 22 年度までの 16 年間という長期計画で取り組んでまいります。

新しい『土浦市史』編さん事業は、単に“市史”を刊行することにとどまらず、先人たちが築いてきた歴史を知ってもらい、ふるさとへの理解や愛着を深め、将来のまちづくりにつなげていくことを目的としています。

長期にわたる事業となりますが、皆さんのご理解とご協力をお願いいたします。
(高橋三千代)



昭和 50 年に刊行された『土浦市史』ほか
(当館所蔵)

市史こぼれ話（1）ふたつの「土浦市報」



写真左「土浦市報 創刊号」、写真右「土浦市報 第一号」（いずれも当館所蔵）

土浦市の広報紙「広報つちうら」の最新号は No.1406（2026 年 6 月中旬号）です。

現在の広報紙のルーツは写真左の「土浦市報」創刊号とされています。昭和 25（1950）年 8 月 1 日に市制施行 10 周年を記念し発行されました。

さて、実は写真右も「土浦市報」です。こちらは土浦市誕生の 1 年後、昭和 16 年発行のもので、昭和 61 年に市民の方から寄贈されたもので、同じものは市役所にも残っていないようです。
(野田礼子)

霞 短信

このコーナーでは、博物館活動にかかわる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号では、平成30年より当館附属展示施設東櫓に勤務されている宮越雄二さんにご寄稿をいただきました。

東櫓に勤務して

東櫓は平成10（1998）年10月に再建されてから28年の歳月が過ぎました。その間、東日本大震災による臨時休館（2011年4月～2012年6月）もありましたが、現在までに日本全国からの来館者は延べ26万人を数えます。

下の表を見ると平成29年4月6日（シロの日）に土浦城が「続日本100名城」に認定され、翌年からその記念スタンプを求めるお客さんが日本全国から訪れるようになり、入館者がおよそ1.5倍に増えているのがわかります。

令和の時代になり、新型コロナウイルスの流行等を乗り越え、ここ数年、来館者はさらに増えています。

年	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
人	8,591	13,652	13,649	7,827	6,290	12,335	16,786	15,589	15,996

東櫓は、1階が20坪、2階が12坪程度の小規模な建築物ですが、直径60cmの梁や30cm角の柱の重厚感に圧倒され、また、釘を使わない木組みの美しさ、さらに木の香りや木目のやさしさにふれ、多くの方々から感動の言葉をいただきます。全国の豪華絢爛な名城を見てこられた方からの言葉だけに嬉しさがこみあげる瞬間です。

毎年4月の桜まつりや11月の全国花火大会の日は無料開館となり、多くのお客さんでにぎわいます。特に桜まつりのころはカメラを構えたお客さんで東櫓の2階が混みあいます。中には、塗込戸を額縁に見立て、その中に満開の桜をおさめ、自慢げに見せてくれる方もいらっしゃいます。

最近では、日本全国からだけでなく、諸外国からの訪問客も多くなり、各展示コーナーの英語による説明を熱心に読む姿が見受けられます。

今後とも、博物館とともに東櫓を訪れる人々が増え続けることを願っております。（土浦市立博物館附属展示施設東櫓受付 宮越雄二）



東櫓から見た桜

コラム（67） 土浦市の歴史文化遺産情報ライブラリー

令和5（2023）年4月施行の改正博物館法では、博物館の事業として、「博物館資料に係る電磁的記録を作成し、公開すること」が新たに追加されました。これは、収蔵資料をデジタル化して保存（＝デジタル・アーカイブ化）し、インターネット等を通じて公開することが明文化されたことを意味します。

当館では平成19（2007）年に設置した展示ホールの「情報ライブラリー」を、外部アクセス可能な仕様に変更することで、改正に対応しました。専用のサーバー更新、外部アクセスが可能なデータベース（検索システム）の構築を進め、令和8年3月に「土浦市の歴史文化遺産情報ライブラリー」として運用を開始しています。



現時点で公開できている情報はまだ限定的ですが、多くの皆さまにご利用いただけるよう、内容の充実を図っていきたく思います。ライブラリーは左のQRコードからアクセスしてください。（萩谷良太）

土浦市の歴史文化遺産 情報ライブラリー公開状況

【2026.6.29現在の登録数】204点

- ①映像ライブラリー・・・16点
- ②古写真ライブラリー・・・2点
- ③絵葉書ライブラリー・・・81点
- ④絵巻物ライブラリー・・・30点
- ⑤古文書ライブラリー（準備中）
- ⑥歴史資料ライブラリー・・・36点
- ⑦民俗資料ライブラリー・・・39点
- ⑧新聞記事ライブラリー（準備中）

霞（かすみ） 2026年度

夏季展示室だより（通巻第67号）

編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/tsuchiurashiritsuhakubutsukan/index.html>

1～6ページのタイトルバック（背景）は、博物館2階庭園展示です。

2026年度夏季展示は、2026年6月30日（火）～9月27日（日）となります。「霞」2026年度秋季展示室だより（通巻第68号）は2026年9月29日（火）発行予定です。次回の来館もお待ちしております。